表紙画像

新樹光

小島とよ子著

平成十二年五月十七日発行

北溟社

やんはりと嬰抱き上ぐる新樹光

しやべりだしさうな光のぼたんの芽

枯菊の余命壺中へ活けにけり

水仙のふところ深く客待てり

明日開く夢のふくらみ花菖蒲

壺に挿しすぐ風さそふ花薄

繰り言はいはぬと決めて白水仙

浴衣着て渚の声を手に掬ふ

白地図の夢は無限の実南天

花開くやうな嬰児の欠伸かな

蒼天へ絮たんぽぽの行く未来

旅ふた夜戻れば違ふ柿若葉

燕来てよりの小江戸の活気づく

秋まつり小江戸絵巻の息づかひ

緑さす蔵店奥のつるべ井戸

鳥雲に小江戸駄菓子屋ふくれたり

打水や風透きとほる蔵の店

新馬鈴薯のふつくら煮えて夫待てり

日盛りを帰る夫への風呂加減

初音かな夫を起こしてより鳴かず

絶筆の日記となるや冬木の芽

返り花いそぎし亡夫の忘れ物

現世へ亡夫来るといふ冬の虹

小春日や夫の遺愛の万年筆

七七忌ことなく済みて柚子湯かな

墓石の新文字入り山眠る

枯菊を焚きしめくくる胸の内

竹下駄の白き鼻緒や嵯峨時雨

岩走る垂水の白く草萌ゆる

色葉降る白き酒蔵の影をひき

そぞろ寒一瞬湾の白襖

石臼の蹲踞となる白桔梗

杓一つ岩に置きけり夏の雲

散紅葉いちまいは星空へ飛ぶ

草萌えて塑像の馬を歩ましむ

大富士へ子は手を離し入学す

落ちてすぐ大河をめざす花筏

長城に佇ち触れてみむ夏の雲

大雁塔登つて来しと青蜻蛉

兵馬俑坑ときめかす花樗

花束を解き新秋の生まれけり

冬銀河両手にぎりて嬰生まる

人聲にもらふ明るさ二日かな

連嶺の襞より春の動きけり

亀が亀の背より落ちて木の芽季

菱餅の反りかへりたり夕灯

ささにごりして山葵田のまた澄めり

竹の子と分る包みの届きをり

鼓打つ前のしぐさや五月空

蘆の花水に溶けゐる舫ひ綱